

# 三重済美学院を訪れて

芝 崎 真 悟

七月十一日、今日から夏期休暇だ。九時三十分京都駅から近鉄にて一路、伊勢に向った。久かたぶりの伊勢である。脇から「先生と旅行するのは、はじめてですね」と小さな体を揺って笑っている、海野君である。彼は、暇があれば済美学院に行って手伝っているのである。と言うのも、彼の伯父さんが済美学院の主事をやっておられるからである。私は、良き案内者を得て訪れることができた。

伊勢市の駅からタクシーで二十分程の少し街から離れた閑静な所に「さいび」という文字が見えた。後で聞いたのだが、二万八千平方メートルの敷地を持つ大きな施設である。精神薄弱児施設、精神薄弱者援護施設、通園施設、婦人保護施設、精神薄弱者更生援護施設等、精神薄弱児者の総合センターである。

近年富みに総合センター・コロニー建設等の世論の声が高くなっているのであるが、

明治三十四年、能教海上人により育児院が創設されて以来、昭和二十九年に精薄施設にも着手し、約二十二年間、精薄施設

を充実すべく、努力されてこられ、現在の総合センターとなったのであるが、この間、東奔西走して、福祉事業に人生を掛けてこられた奥田法敵園長は、もう八十を越えておられるが、矍鑠とした声で、しみじみと、

「今まで、時代の要請に応じて、施設を建て、改修し、新築して施設づくりをやってきました。しかし、今まで一度も施設づくりが社会福祉であるなどと思ったことはありません。やはり、施設はなくてはならないと思います。一日も早く施設がなくなることを願っているのです。」と遠くで子供達がキャー・キャーと戯れている姿に目をやり、語って下さった。

横で、指導に携っておられる奥田弘先生は、

「精薄児ってかわいいものです。この間も、雨が降ったあとの水たまりにバンドをたらしっている子がいるんです。何にしてんの?と聞きますと、おどどつっているの。と言うんです。つまり、近くに釣り堀りがあります、糸を垂らすと魚が釣れるという思考なんです。かわいいもんです。」

と温かい眼差で語って下さった。園長さんも又、

「精薄児は神様、仏様です。あんなに純真な子供を見ると、私たちがおかしいのではないかと思う様なことがあります。」

「やはり、苦痛に感じている様では施設職員は努まりませんね。子供達が少しでも変化した。発達した時、やはり生甲斐ですね。やっている過程、そのものが楽しいのではないのでしょうか。脳性麻痺の子供でね、片方の足が短く、一方が長い子供さんがいますの、ギッコン、バタンさせる子供でねえ、職員が、自分のハイヒールを履かせてみたくんです。そうすると、カッソン、カッソンさせて歩くんです。先生、あの子、こうしたら喜んで歩いてくれました。」と言って喜んで来ました。

おそらく、その職員にとって楽しい一時ではなかったのではないのでしょうか。思った様に子供が反応してくれた時、彼らから何かを新しく発見した時、報われるのではないのでしょうか。そういう時に喜びを見出せない職員は努まらないのではないのでしょうか。変化している中で、自分とのかか

わりによつて発見する。それが生甲斐ではないか。おそらく、皆そんな気持でやっているのではないのでしょうか。………ただ苦にならないということは事実です。」と奥田弘先生は漏らしておられた。

精薄児者とともに生き、生活し、その過程で、相手が自分によつて、自分が相手に



よつて生かされている。そこに、施設職員として、人間として真に生きていることを膚で感じ、喜びを得ておられる。この姿こそ、真に手を合わせ、念じる仏の心ではないのでしょうか。

仏教の言葉を並べ、「ねばならない」とする私の心が恥ずかしく思われました。

昭和四十九年に、精薄者援護（更生）施設を済美学院内に一舎設け、七月に済美学院より、車で三十分程の度会郡度会町に「度会学園」を建設された。定員五十名の更生援護施設である。日常生活習慣の確立、共同生活、働くことの経験、自信等を生活、作業を通じて、社会適応を能力に応じ指導訓練しておられる。

五七二七平方米にゆつたりと建てられた小さな学園である。能次雄氏に伺うと、この土地は、精薄児を持つ一家庭が、我子の為にと、土地を提供して下さったものとのこと。又この施設に従事しておられる方達はほとんどこの度会町の住民である。さらにこの土地度会には、まだ社会福祉施設が一ヶ所もなく、この度会学園が最初の施設であるとも語って下さった。

この地域の地場産業は、お茶の栽培、養鶏、アイスクリームのスプーン工場が主な様である。そこで、彼らは、村へ出かけていって、茶畑の世話をする。鳥の卵の大小を選別する。卵を箱に詰める。スプーンを袋に入れる等、能力に応じ、村の仕事に従事する人達とともに仕事をやっているの

ある。

勿論、日当いくらと賃金をもらってである。村の人達は、喜んで彼らを受入れ、遠くから見守っていると言う。この地域にこの様な施設が出来ることに關しては、主として障害児を持つ両親、度会の婦人会、村の責任者等が積極的な力を貸し、皆の要望で建設されたと言う。三ヶ月に一回の割合で、國の者が我家へ家庭実習として、帰省もしている。彼らの問題は、もっぱら仕事先での出来事、作業の事である様だ。

少し紙数が多くなるので、私なりの感想を断片的ではあるが述べますと、

近來、とみに若者は都市へ都市へと流れ、村は過疎化現象が生じてきつつあるが、この現象は、この度会郡においてもやはり同じ様で、若者はとみに少なくなってきたと言う。地場産業のお茶、しいたけを栽培したり、鳥の世話をする人が手薄になり、弱っていると言う。ここに、彼らの手をも貸りなければ、成り立たない状態になり始めたことも一つの要因ではないだろうか。かなり極端な言い方をするならば、地場産業の補充作用として福祉機能が

作用するという一側面も添える様に思われる。勿論、この地域の人々の温かい人間愛に裏打ちされてではあるが、能次雄氏の話によると、近々に、保育所、老人ホームも建設される予定になっているとのこと。

これらさまざまを眼の当にして、社会が時々刻々と変化していくにつれ、地域、村もその影響を受け、徐々にその変化に対応せざるをえなくなってきた。まだまだこの地域では、ほとんどが三世代家族、村意識が濃厚の様であるが、これらの地域に、社会福祉とりわけ、施設が建設されていくことによって、今まで形成し、育んできた家族、村、地域の我々意識が、どの様に変化していくのであろうか。その場合、社会福祉の機能は、どの様な役割を担うことになるのであろうか。この村でも、今人生の選択にせまられているのである。

園長先生はじめ、奥田弘先生、能次雄氏と大変、お世話になり、諸先生方の温かい御心づかいに深く感謝するとともに、子供たちとも接し、この二日間、済美学院を通して、伊勢市、とりわけ、度会町の人達が身近に思え、離れがたい思いに迫られなが

ら、園の人達の振る手に答えつつ、胸がジーンと熱く、何か息がつまる様な思いで、度会学園をあとにした。

いつか機会があれば、この度会郡に学生を連れて調査を通じ、村の人たちと接してみたいと思ひながら。

ありがとうございました。

(社会福祉学・専任講師)

